芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 35　52. 6

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　英武　編集人・浅田弘明

芸術振興と県立芸術会館の完成

大分県知事　立木　勝

最近、大分県芸術祭などに見られるとおり、オペラ、舞踊、音楽、演劇、文芸の各部門において、水準の高い芸術創造活動が展開され、年毎に発展充実を遂げつつあることは誠に喜ばしい限りである。

しかし、こうした優れた県民芸術活動も、その舞台、センターである会場、施設が不十分で、折角の発表活動も大きな制約を受けていたのであるが、このたび待望の県立芸術会館が完成し、いよいよ9月25日にオープンの運びとなった。 大分川にかかる舞鶴橋を過ぎて、国道197号線を東大分へ向かうと、右手、裏川にそって鉄筋3階建、煉瓦色のどっしりとした建物が目につく。総工費約16億円、いま、その最後の仕上げが急がれている。

この一帯は、区画整理事業により整備され、交通の利便と安全維持にすぐれた条件を備えている。周辺が緑地公園地域となり、また、大洲総合運動公園、護国神社のある松栄山、丸尾山県民公園など憩いとレクリエーションの場も近いので、公園と芸術会館の機能を一体的にとらえることができ、建物は、文化施設として、最新の機能を具備し、後世に恥じないものとするとともに、参観者の交歓の場となる広場を設けるなど、数々の配慮がなされている。

もとより大分県は、文化的に古い歴史を持ち、その風土に培われた県民の中からは、思想家、芸術家、教育者など多くの文化関係者を輩出している。これらの人びとの作品の展覧会や公演に接することは、県民の芸術的欲求に応えることであり、高まりつつある芸術文化振興への熱意を更に育成するものである。

芸術会館開館記念行事として、大分美術千年展、日展、記念音楽会、歌舞伎など有意義な催しが計画されており、それらは、必ずや県民の期待に応え得るものと確信している。

また、これを機として、次々と大きな催しが計画され、会館の機能を十二分に発揮するものと思う。

しかし、こうした設備の備わった会館を利用し運用するも人であり、芸術を振興させ、豊かな文化的風土を築くのも人であって、芸術振興に関係する皆さんの手にこそ、それを開く鍵が握られているのだと言えよう。

私は、皆さんに、その優れた運用を期待する。

大分県芸術祭の夢

美をうけとめる心

浅　田　弘　明
県芸振会議事務局長・県教委文化課長

最近は、物の豊かさとともに、これまで以上に心の豊かさを求める傾向が強くなってきました。

大分県では「ふるさとづくり運動」を展開する中で「心豊かな人づくり」をめざし、また県教育委員会では「豊かな人間性を育てる学校教育」の実現を進めています。

さて、この豊かな人間形成のためには芸術文化の果たす役割は極めて大きく、また、その意味では大分県芸術文化振興会議に寄せる期待も非常に高まってきていると思います。

さきに発表された文化行政長期総合計画懇談会のまとめによりますと芸術文化活動の今後の改善策として「参加する文化活動」の振興を第一に強調しております。

従来は、とかく、芸術文化の振興といえば、鑑賞の機会をより多く提供することに力点をかけていた傾向ではなかったかと思います。

しかし、「創造する」という芸術文化の本来の課題を考えるとき、見ることにとどまるのではなく、自ら創り、自ら演ずるところに価値を見出していく方向を考えなければならないと思います。受動的に享受する鑑賞にとどまらず更に一歩進んで、積極的に芸術文化活動に参加し、創造していくことが必要であると思います。そこに「参加する文化活動」が唱えられた背景があるのではないでしょうか。

本年は、待望の芸術会館もいよいよ開館します。芸術文化の鑑賞の場、そして創造の場として広く人々に活用され大分県の芸術文化発展の母胎としての大きな役割が期待されております。〃芸振〃もこの機会に大きな飛躍をすることを願っています。

さて、本年度、芸振会議事務局の仕事を担当させて頂くことになりました、ついては京都国立近代美術館長の河北倫明氏の話が浮んできます。

「芸術文化の仕事を担当する者は、先ず、〃美をうけとめる心〃を持ちあわせていなければならない。もしそうでなかったならば仕事の方向は狂ってくるし、内容もからまわりをしてしまうであろう……。」と。

事務局長という重要な職責を前にして、この「美をうけとめる心」の修行から先ず始めなければと心に誓っています。

大分県立芸術会館ホールのどんちょう『豊後』　原画は高山辰雄氏制作

地域でそれぞれ個性豊かな文化祭、芸術祭が活発になっているようで喜ばしい限りです。しかし、これらは、年々派手になり大型化していく県中央での芸術祭の影にかくれて、小さくても興味ある行事が、情報化されていないように思われます。たとえば、事前、事後の報告を出しても、○○市文化祭の一行にまとめられ、内容の見当もつきませんし、文化年鑑での論評も、大分中心の大型行事だけに主力がそそがれているように感じられます。やってやり甲斐なく、報告して報告のし甲斐のないのが、文化振興会議、芸術祭に参加している地方市町村の文化団体、活動ではないでしょうか。

地域の地味だが実のある活動が、大分市、その他の主要郡市で発表され、逆に大分市その他の都市の文化活動が他地域に出かけて行く、このような芸術祭、文化の交流がなされないものでしょうか。

そのためには、余りにも大作主義を志向する芸術祭をもう一度考え直す必要があると思います。

小グループによるオペラ、演劇、室内楽、そして、小品による美術展あるいは伝統的な仏教美術、民俗資料、北原、古要の人形等の展覧会が町村にまで巡回されるような、地域的にも大分県総ぐるみの芸術祭が考えられてよいと思います。

中央中心の芸術祭だけに大きな力をそそぐのではなく、地方文化の育成に温かい手をさしのべていかなければ、県芸術祭の意味がだんだんうすれてくるのではないでしょうか。日頃の情報活動をきめこまかく生かす事によって市町村の文化交流が盛んになるでしょう。

それをふまえて、真の芸術文化、そして行事についての理念、方法を研修する場が持たれるようになれば、大分県の芸術文化はもっと大きく豊かになるのではないでしょうか。希望して夢を追いたいと思います。

地方文化祭・芸術祭の育成を

佐伯文化会館館長　大賀基宏

芸術祭の後始末を大事に

平瀬克美
県芸振会議監事・ゆりかごバレー研究所主宰

大分県芸術祭も今年第13回を迎えました。昭和40年大分県芸術文化振興会議が発足し、そのトップの行事として計画されたのが芸術祭でした。当時ははたして幾組参加するだろうか。と言う不安がありました。それから12年、昨年は70組と言う沢山の参加を見る事が出来ました。その間数多くの文化団体が結成され、県下各地いたる処で文化行事が開催され、作品も素晴らしいものが生まれるようになりました。引金として、芸術祭のはたした役割は予想以上のものがあったと思います。

その芸術祭も13回を迎える今日、そのあり方について再検討してみる必要があるのではなかろうかと感じている次第でございます。

- 参加行事の取り扱い方について
- 諸行事の内容（質）の向上について
- 芸術祭の時期とその期間について
- 芸術祭参加団体の横の交流について
- 芸術祭に対する県費増額とその使途について…等々。

これ等の問題は芸術祭に関係する多くの方々で話し合わなければならないと思います。

私はこれ等の問題の中で特に感ずる一つのことを申し上げたいのでございます。それは芸術祭が近づき、申し込みをしてその催しが終り、感謝状をいただいてそれでおしまい。

何とも言えない物足りなさを感じ、何の為に参加したのだろうかと淋しくなります。芸術祭が終った後、それを批評し、指導して下さる方がほしい。たくさんの方の率直なご意見を聞く機会がほしいのでございます。美術専門の方が演劇を観て率直な意見をのべる、それはそれなりに勉強になると思います。専門の方のご意見は勿論、それ以外でも本物を追求しようとしている方々の感想は私にとってありがたいお声だと思います。これだけ多く文化団体がありながら横の交流の場がないと言う淋しさがございます。次の芸術祭の為にも、大分県芸術文化の向上のためにも、芸術祭の後始末を大事にすることが一つの要素となるのではないかと考えるのでございます。

若い舞台照明家に期待

柏　木　淳　一
ユニーク・アート・ステージ代表取締役・舞台照明家

大分県芸術祭も今年で13回目を迎えます。第１回より12回目迄オペラや演劇、バレエ等芸術祭のメイン行事の舞台照明を担当してまいりましたが、私も舞台照明の道に入って20数年になります。その間色々な事がありました。特に芸術祭の仕事をするようになりバレエ、オペラ、演劇での創作物の裏方としてやりがいのある作品ばかりでした。バレエ朝日長者、オペラ吉四六昇天、演劇山弥長者物語等異質の照明プラン作成は同じ時期に２つ３つと創作の作品が重なる時は今だから言えますが泣きたい位プラン作りに苦労しました。それも過去となってみますとどの作品も精いっぱいやったと言う満足感があります。ホールの設備の話しですが、ステージの大きさ、袖の広さ等ぜいたくを言えば限りがありませんが実現したらどんなに素晴らしいかと思う夢があります。広い屋外劇場があり夏の夜県民憩いの広場として何百台ものライトで音と光の変化を思い切り楽しんでもらえるイタリア音楽祭の様な例えば大分県音楽祭が出来ればと思います。今秋完成する芸術会館、これはどの様なホールなのだろう？別府国際観光会館、大分文化会館、佐伯津久見の様な多目的ホールなのだろうか？これらはすでに間に合ってる様に思えます。芸術会館の敷地内に各部門別の専門ホールが欲しいと思います。不可能な事かもしれませんが、歌舞伎や日本舞踊専門の邦楽会館に能楽堂、バレエ、オペラ、オーケストラの為の音楽会館、人形劇や子供のオーケストラ等子供用の児童ホール、演劇専門の演劇会館、それらに付属した専門のリハーサル室、初めにふれた屋外劇場、この様な文化の殿堂を集めて芸術祭が出来たらどんなに素晴らしいかと夢を見ております。その様な日の来る事を夢見て私自身はむろんのこと社員にも仕事の力をつけておきたいと思います。又私の様な仕事をする若い方が多く育ってくれる事を願っております。

[redacted]

県立芸術会館・開館にあたって(二)

県立芸術会館芸術第二課長　広　瀬　良　博

開館記念行事第三として、ホール部門では、九月二十五日の井上直幸・中山節子・立木稠子各氏によるピアノ独奏および独唱音楽会が催される。

井上直幸氏は福岡市出身。桐朋学園大音楽部ピアノ科を卒業。西独シュトゥッガルト国立音大、続いて西独フライブルグ音楽大を卒業、同大学ピアノ科講師に就任、一九六八年ミュンヘン国際コンクール入賞、一九七五年芸術祭優秀賞受賞。現在桐朋学園大、武庫川学院大で教べんをとる傍ら、ＮＨＫ教育テレビ「ピアノのおけいこ」担当の新進気鋭のピアニストである。

中山節子氏は大分市出身。桐朋学園大音楽科、西独シュトゥッガルト国立音楽大をそれぞれ卒業。渡独以来、主として南ドイツで教会音楽ソリストとして活躍。リード歌手の第一人者として認められている。中山悌一氏に師事。井上直幸氏夫人。

立木稠子氏は大分市出身。東京芸大音楽部声楽科卒業。渡仏後ジャンヌ・バダールに師事。フランス歌曲国際コンクール一位受賞。パリ・エコール・ド・ミュージークを首席卒業。

第四は、文化庁との共催による松竹大歌舞伎と新劇文学座の移動芸術祭の公演がもたれる。

松竹大歌舞伎（十一月十六日・三時間五〇分）を市川猿之助、澤村宗十郎、市川門之助、市川段四郎、坂東好太郎等により「寿曽我対面」「奴道成寺」「侠客御所五郎蔵」の大歌舞伎図絵がくりひろげられる。

新劇文学座（十一月二十五日・三時間二〇分）は杉村春子、三津田健、北村和夫等により小山祐士作の「金木犀はまだ咲かない」書き下し作品を発表する。

以上、芸術会館開館記念事業を紹介したが、これらの事業が、今後の大分県の美術、音楽、演劇、舞踊、文芸等々の、鑑賞、創作活動の契機になり、県の芸林がますます盛んになり、県立芸術会館が県民のための芸術の殿堂となるよう切に願うものである。

[redacted]

豊かな心の広場を創ろう

仲　町　謙　吉
県美術協会事務局長・大分大学教授

昭和40年代は大分県文化活動にとって重要な年代であった。それは大分文化会館を中心として発展し、展開された時代である。この50年代を作る基盤となった時代でもあった。

芸術文化振興会議が結成されたのも41年であり、第１回の県芸術祭が催された。この年、大分文化会館の開館記念として松方コレクション展が催され、その益金が県立美術館建設基金として寄付され、県民の美術館建設に対する要望が急激に高まった。その主役は県美術協会であった。県美協は、県芸術祭の発足と時を同じく第１回の県美展（書道・写真を統合新発足）を催し、この統合を記念して県美協20年展を催し、第１回の芸術祭賞を受けた。名実共に県文化団体のリーダー格として活躍した。美術館建設にも大いに尽力した。５万名の請願署名運動、続いて建設期成会に協力、オークション、街頭募金運動にも努めた。大分県美術百年展は、県出身作家百数名の作品を集め、日本中から注目された。竹田、片多徳郎、朝倉文夫、権藤種男、福田平八郎、生野祥雲斎、江藤純平、佐藤敬、高山辰雄等々代表作が一堂に並べられた。これは美術館の必要性を具体的に示した大きな催しであった。県行政も文化係から文化課に発展し、やや積極性がうかがわれるようになったのもこの時からである。美術館が、芸術会館にと変ってしまったが開館が迫っている現代、大いに芸術会館を中心の場として、大分文化会館の初期展開時代を手がかりとして活躍しなければなるまい。

芸術会館が貸館的なものになってはならないし、県美協も、創作発表のみにこだわらず、鑑賞展の誘致、創作活動へのさそい。鑑賞への手引にと、場を活かし、県民に健全で豊かな心の広場を創ることに努めたいものである。更には、全県的な広がりを考え、巡回展や地域での展示、地域での創作活動にも支部組織の発展を期待するものである。こうした50年代の充実期が今始まろうとしている。大いに手をとり合って文化創造に尽力したい。

県立芸術会館・開館にあたって㈠

県立芸術会館学芸第一課長　芦　刈　政　治

大分県民の長年の夢と希望を担って、県立芸術会館がいよいよ今秋開館の運びとなった。九月二十五日の開館記念式典をはじめとして記念行事を次のように企画している。

まず、「大分の美術千年展」を九月二十五日から十月十一日まで開催する。これは大分における仏教美術が発展期を迎える藤原時代から、美術家が華々しい活躍を見せる現代にいたるまで凡そ千年間の、仏教・神道美術、武家・先哲・文人の美術、そして近・現代美術などのうち、郷土大分の風土にはぐくまれ、大分の人びとによって信仰、鑑賞され、あるいは制作された国宝・重要文化財・重要美術品などの名宝および歴史に残る田能村竹田や片多徳郎、朝倉文夫、福田八平郎、生野祥雲斎をはじめとする県出身作家の秀作約二百点が、一堂に会することはもちろん今回が初めてのことであり、非常に期待されるところである。

次に開館記念事業の第二として、「第八回日展大分展」を十月十六日から十一月十三日まで開催する。これは昭和五十一年度の日展作品（日本画・洋画・彫刻・工芸・書など三三七点、うち県出身作家入選作品十点、基本選定作品三二七点）を展示する。

また、この日展の大分巡回展を記念して、前日展理事長高山辰雄氏による「日展記念講演会」を開き、「芸術の進歩に貢献する」という日展の趣旨について理解を深めるとともに、現代美術の動向を知り、創作意欲を高めていただく契機にしたいと考えている。

波紋

大分県芸術祭の今後

大分合同新聞文化部次長　狭間　久

大分県芸術祭も今年で十三回を迎える。何事もそうだが、十年以上も続くと、マンネリの傾向が出てくるのは仕方のないことだろう。県芸術祭にしても例外ではないと思う。

とはいえ、参加行事は年々ふえている。一見、芸術祭は盛んという印象を与える。しかし行事数がふえれば、それが芸術祭の盛り上がりかというと疑問である。行事数がふえることは、底辺の拡がりという点では、評価できる。例えば、初期のころに比べて、市町村単位の文化祭参加の増加などは、県芸術祭の底辺拡大に確かに役立った。

しかし底辺拡大と同時に、行事内容、質の向上がなければ、文字通り片手落ちである。今後の問題は質の向上にあると思う。

そのためには、県芸術祭の選考方法をガラリとかえるとか、予算（会場費）の出る共催行事の決め方を考え直す必要があるのではなかろうか。

質の向上のためには、権威ある〃賞〃を設けることがてっとりばやい。これまでの県芸術祭賞は、主要な団体に順番に与えていたという感じだし、開幕や閉幕の大役を無事果たした〃ごくろうさん〃的賞ではなかったか。県内の主要な文化団体はほとんどもれなく一度は県芸術祭賞をもらっただろう。これからは、団体対象ではなく、個人賞的な色彩を強く出してもよいのではないか。

例えば、オペラの出演者がすばらしかったなら、演劇の演出がよかったなら、美術展の作品が優れていたら、その出演者や演出者や美術家に県芸術祭賞を与えるのである。団体賞では、もらって喜ぶのは団体の代表者ぐらい（？）だろうが、個人賞的になると、個人個人の励みになろう。それがひいては県芸術祭自体のレベルアップにつながることにはならないだろうか。

共催行事はいまや特定団体に専有化されているが、好ましくない。行事の質、内容でその年の共催行事を決めるべきではないか。

ミュージカルへの発展を望む

加　藤　公　康
大分交響楽団指揮者・大分大学助教授

県民オペラが「フィガロの結婚」で旗上げをしたのは昭和43年、県芸術祭第４回の開幕行事においてだった。これに刺戟されてかその後県民バレエ、県民演劇など、いわゆる県民ものが登場して芸術祭を華やかに飾ってきた。しかも各分野とも一発花火的なものでなく、毎年確実な歩みを続け、それなりの成長をみせている事は喜ばしい。

ところでこれらの活動はアマチュアの人達を中心に行われるだけに、技量が不十分であり、まずそれらを向上させる事が大切であるには違いない。オペラでは歌唱力が、演劇では演技力が第一に要求されるのは当然である。しかしオペラでは歌唱力があっても演技力がなければその成果は十分に上らない。同じ舞台芸術として演劇、バレエにも同じ様な事がいえるだろう。演劇には音楽的なリズム感、バレエにはセリフを通しての感情表現の体得など、歌、演技、踊りなどそれぞれ専門技術以外の、いわば舞台人としての基礎的な要素を各分野とも幅ひろく追求する段階にきているのではなかろうか。プロであればそんな事は当然な事だがアマチュアの場合専門的な技術だけでもままならないが、そうした基礎的トレーニングが逆に技術向上にもつながる。

ところで今のように各分野がそれぞれ別々に活動をしているのではなく（今迄にオペラではバレエ、演劇では踊りの場面に一部の交流はあったが）この際三者が共同して作る舞台、例えばミュージカルなどが近い将来考えられてよいのではないか。ミュージカルといってもあちらものでなく身近かな題材によるもので（劇団四季による「吉四六の龍退治」というのがあったが）できれば県在住者による台本作曲であれば話は更に楽しくなる。

日本ではプロの世界でもミュージカルは定着し難いし、スマートにやらないと妙なものになる心配はあるが、そういうものを創り上げていく過程で、各分野での足りない部分を補い合いながら交流が行われれば県下の文化活動そのものも一層活発になっていく事であろう。

オペラ『カルメン』上演の夢が実現

小　長　隆　成
大分県県民オペラ協会事務局長

昭和52年の大分県芸術祭は、県下文化団体の長年の夢であった芸術会館の完成と相俟って10月１日から開催されようとしています。

大分県県民オペラは、本年の開幕行事の重責を荷うとともに、芸術会館の最初の使用団体になることになりました。それで本年の公演作品を決めるにあたり、多くの方々のご意見をうかがい慎重に検討してビゼー作曲、オペラ「カルメン」をとりあげることにいたしました。

このオペラは舞台装置が大がかりである上に子供から大人まで出演者が多く、また演奏も難しい作品でありますが、よく知られ親しまれているオペラの一つであります。県民オペラは芸術会館の落成を記念するとともに、県民オペラが昭和42年秋発足してから約10年の年月の中で常にもちつづけた「カルメン」公演の夢を本年こそは実現したいと準備をしています。

県民オペラは県下の多くの方々のご支援と後援会の方々のご援助により、毎年公演をつづけることが出来ました。特に50年１月26日オペラ「吉四六昇天」東京公演は皇太子殿下御一家のご観覧の栄に浴しましたことは、関係者一同のよろこびでした。以来県民オペラは全国より注目をあび特に創作オペラ「吉四六昇天」の上演は、わが国のオペラ史上に特筆すべきオペラ運動であるとともに地域文化運動に大きな影響をあたえました。大分県県民オペラの発案で九州各県のオペラ団体が手をつなぎ九州オペラ協議会を結成したのもその一つであります。静岡オペラや茨城オペラをはじめ各地のオペラ関係団体の連係の話もすすめられています。

県民オペラは「ワーグナーを観るならバイロイトへ!!」のキャッチフレーズのように「地方オペラを観るなら大分県へ!!」の自覚をもって練習に励んでいます。

[redacted]

文化不毛の地といわれてきた大分で、県芸術祭が十年をこえる歴史をもってきたことは大したものです。

一年一年内容が充実し、ジャンルや地域・職域の参加がふえ、その中でお互いの文化交流が生まれ、「不毛」を脱出して、オペラや演劇のような新しい動きが生まれてきたことは大いにたたえられていいと思います。

施設、時間、経費など想像以上の苦労の中で民話を主題にした県民オペラの成功は、今後の地方における文化のあり方を示唆するものとしてとくに注目しています。

これが一つの刺戟となって、他のジャンルに大きなゆさぶりをかけ、芸術祭をより充実・発展させたといえると思います。

不況・インフレのきびしい毎日のくらしの中で、自殺、蒸発、殺傷、退廃などがはびこって、「生きがい」を失いつつある風潮のなかで明るくたくましく、生きるよろこびを感じる芸術・文化・創造の活動や運動がより一層大切になっています。

芸術会館完成を機に、より一層の地についた県民の文化活動の発展が必要になっているのではないでしょうか。

地域や職場にある小さな目立たない公共的文化施設を一つの拠点としながら、職場や地域での文化行事、文化活動が秋の芸術祭のささえになってほしいものです。

文化の味もにおいもない地域公民館ではなく、絵をかき、歌をうたい、おどりをおどるあたたかい人間味のある「生きがい」の場になってほしいものです。

小さな公園でのおどりの会や、ジャズやクラシックの演奏会、詩の朗読会、ちょっとした絵画、書、マンガなどの展示会が、グループやサークルの人たちの手でやられ、そこでは会話や対話がはじまっています。

そのような素地は出来ているのではないでしょうか。よびかけと場所と金さえあれば、もう一つ地についた、息の長い文化・芸術が生まれるのではないかと思っています。

やろうと思えば実現出来るささやかな夢です。この夢をはかないものにさせたくありません。

[redacted]

生きる喜びの創造

県芸振会議・県文団連理事　木村成敏

大分県立芸術会館の開館 (52.9.25)

<県立芸術会館の5つの役割>

1 国宝などの文化財および現代の美術作品や、すぐれた音楽、演劇、舞踊などを紹介します。
2 講演、講座を企画し、自主的な学習の場を設けます。
3 芸術文化の創造活動ができるように、施設利用の便宜をはかります。
4 芸術文化についての調査、研究をすすめ、その情報を提供します。
5 芸術文化に親しみながら、心のつながりを深め、楽しい憩いの場となるよう努めます。

◦**位　置**　大分市大字牧　大分駅より3.5km　県庁より2.2km　◦**交通機関**　大分バス（鶴崎線）花津留バス停下車
◦**敷　地**　12,000㎡　◦**建築面積**　4,121.4㎡　◦**延床面積**　5,999.1㎡
◦**構　造**　鉄骨、鉄筋コンクリート

(1) ホール棟（3階）　舞台　間口18m　奥行14m　高さ7.5m　客席　1,022席　オーケストラピットリハーサル室　楽屋（3室）
(2) 展示棟（2階）　展示室（3室）　収蔵庫　搬入・荷扱工作室（2室）
(3) 管理棟（3階）　講堂　講座室　会議室　事務室等

消　息

◦**県芸振会議役員の改選**
団体代表者の交代によって次の方々が新しく選出されました。
理　事　土屋　元造（大分県高文連会長）
監　事　田村　卓夫（大分上野丘高校長）
事務局長　浅田　弘明（県教委文化課長）

◦**県教委文化課の異動**＝県芸振事務局関係＝（　）は旧任
・新　任
文化課長　浅田弘明（学校教育課主幹）
文化課長補佐　後藤昭六（文化課主幹）
文化課庶務係長　徳丸欽也（社会教育課庶務係長）
・転　任
芸術会館副館長　衛藤　久（文化課長）
大分雄城台高校事務長　木下　孝（文化課長補佐）
―4月26日ご逝去―
学校教育課庶務係長　河野通徳（文化課庶務係長）

第13回大分県芸術祭について

◦県芸術際は、県民の芸術文化の創造と進展に寄与するため毎年実施されています。
本年も、10月1日から11月30日の2か月間全県に亘って開催されます。
文化関係団体の御参加をおすすめします。

◦第13回大分県芸術祭に、参加行事として参加したい団体は、芸術祭にふさわしい内容で、文芸・美術・音楽・舞踊・演劇・生活芸術及び地域における文化行事等の部門であれば認められます。

◦参加行事として認められますと、ポスターやプログラム等に、「第13回大分県芸術祭参加」と表示することになっています。

◦経費は、行事の当該主催団体が負担します。

◦お問い合せや、参加行事としての申し込みは、県教育庁文化課（TEL0975―32―1111番）へどうぞ。

かわの眼科

河野　彰

大分市府内町2丁目5―9（トキハ北口通り）

TEL　大分（0975）32―2480
時間外　36―7547